

科 目 名	学年	期別・授業形態・単位数	教 員 名
インターンシップ Internship	1 または 2	原則として夏季・実習・ 2単位	機械制御システム工学コース長 研 究 室 内線電話 e-mail:
	授業（時間）＋自己学習（時間）＝標準 時間の学習時間		
	科目到達レベル：□1. 知識・記憶 □2. 理解 □3. 適用 □4. 分析 <input checked="" type="checkbox"/> 5. 評価 □6. 創造		
【授業目的】			
協定先の海外を含む高等教育機関、企業等における一定期間の実習または研修や就業体験を通じて、専門分野における知識・技術・業務に触れながら実務能力を深め、新たな学習意欲を高めることを目的とする。			
【Course Objectives】			
Through employment experiences for a fixed period in a company, a public corporation or an organization of a local self-governing body (or a country), students study the manners as member of society, a sense of responsibility over work, an engineer's role and technical importance. Moreover, students raise their occupational consciousness and can tackle study with a strong awareness for a future employment			
【到達目標】			
<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会人としてのマナーや仕事に対する責任感を学ぶ。 2. 自らのマナーや責任感を向上することができる。 3. 「ものづくり」の技術の大切さを説明できる。 4. 進路意識を高め、就職等の対策を立てることができる。 5. 今後の勉学の動機付けを見出すことができる。 			
【学習・教育到達目標】			
(C) 習得した知識を統合して、社会に貢献できる製品やシステムを設計・開発する創造的能力と意欲を有する。			
【キーワード】		【授業時間】	
インターンシップ, ものづくり, 工場実習 internship, making of things, factory practice		8時間×10日＝80時間	
【授業方法】		【学習方法】	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 原則として、夏期休業中に10日間以上、交流協定校・企業等に出向いて研修をする。 2. 受講申し込みは、「インターンシップ履修に関する規定」に従い「申込書」と「誓約書」を専攻長に提出する。 3. 研修終了後は、「インターンシップ実施証明書」をコース長に提出する。 		<ol style="list-style-type: none"> 1. 研修プログラムは、受け入れ機関が指定する場合と、事前打ち合わせをする場合がある。 2. 経費については、打ち合わせ先に一任する（日当あり／なし、交通費あり／なし、宿舎あり／なし）。 3. 傷害保険に加入する。 4. インターンシップ報告会の資料作成のための自己学習を義務づける。 	
【履修上の注意】		【科目の位置付け】	
本校学生として恥ずかしくない態度で臨むこと、また、学習の一環であることを認識し取り組むこと。		<ol style="list-style-type: none"> 1. 先行して履修すべき科目 2. 後で履修する関連科目 3. 同時に履修する関連科目 	
【定期試験の実施方法】			
なし			
【成績の評価方法・評価基準】			
<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生が提出したインターンシップ報告書 2. インターンシップ受け入れ先から発行された実施証明書 3. インターンシップ報告会における発表 到達目標と上の1～3をもとに、専攻科委員会にて審議し、合否を判定する。			

【教科書・教材等】**【参考書・参照 URL 等】****【授業計画】**

	内 容	到達目標
	原則として、夏期休業中の10日間以上、協定先の海外を含む高等教育機関、企業、公団、地方自治体、国の機関等に出向き、受け入れ側から提供されるテーマに基づいて実習・研修を行う。	1 - 5

【学生へのメッセージ】

インターンシップは技術者教育の一環として、学校で学んだ知識・技術を、協定先の海外を含む高等教育機関、企業等で実際に実習等を体験するものである。

体験を通して、今のような技術が社会で必要とされているのか、そのためには何を学ぶべきか、また、実際に「ものづくり」の技や学術研究の一端に触れ、同時に自分の技術的・研究的センスを発見する絶好の機会である。

さらには、将来に向けて、進路意識を高め就職・進学対策の一助と位置づけ、取り組んでくれることを期待する。